The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<Book Review> Elizabeth Grosz, Time Travels : Feminism, Nature, Power, Duke University Press, 2005.
Author(s)	高階, 絵里子
Citation	年報人間科学. 2013, 34, p. 235-240
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24972
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Elizabeth Grosz

Time Travels: Feminism, Nature, Power

Duke University Press, 2005.

高階 絵理子

はじめに

著者のエリザベス・グロスはオーストラリア出身のフェミニストで、現在はアメリカのデューク大学で教鞭をとっている[1)]。ラカンやフーコーなどのフランス現代思想を英訳する仕事を多くこなしており、本書でも進化論を中心に生命と時間について論じながら、ベルクソンやドゥルーズ、デリダなどの思想の紹介もしている。

本書は、生命にとっての時間に注目した複数のエッセイをまとめたもので、それらはそれぞれ書かれた時期や場所が異なっている。初期のものは、彼女がオーストラリアのモナシュ大学の批判理論とカルチュラル・スタディーズのプログラムに在任している時に、中期の大部分はニューヨーク州立大学の比較文学と英語の学部で、そして最後のエッセイはラトガース大学の女性学とジェンダー学の学部において書かれた。しかし哲学的、社会的、文化的、政治的言説から排除されてしまっている「時間性」の概念を探索するという点で共通している。「時間性」をはじめとした様々な概念を「旅」することという本書の目的こそが、タイトル “Time Travels” の意味である。

時間、生成、未来が本書の主な対象であるが、そこでの論点を先に押さえておきたい。1. 文化や欲望や主体性やアイデンティティやセクシュアリティは、自然や生物学や非人間的諸力に依存している。2. 知識、認識論、方法論は、実在や外部や物質性といった知識を刺激するものに負っているところがある。3. 目的論の概念を捉えなおし、目的論を実践に復帰させる。4. 時間は、社会的政治的実践において無慈悲に流れ、それを決定不可能な新たな方向へと開く。5. 生成の諸力は、我々が自身を理解する方法をも変え、主体概念をも揺るがす。つまり主体やグループは統一されたひとつのエージェンシーであるというより、競争する多くのミクロエージェンシーで構成されていると解釈される。6. 対立的な二分法で捉えられがちなものが、単なる二分法ではなく、下位の言葉は上位の言葉の下地として機能している。

まとめると、これまで能動的で支配的だと考えられていたものは、受動的で従属的に思われていたものに拠って立つところがあった。本書はその依存を明らかにすることで、背景となっている層に光を当てている。

本書の構成

本書は大きく分けて 4 つのパートからなっている。

まずパートⅠ「自然、文化、未来」では、ダーウィンやデネットの思想を紹介しながら、進化論に関する議論から生きものにとっての時間の重要性を示す。次にパートⅡ「法、正義、未来」では、時間が不可逆的に流れていること、未来が予測不可能であることのために、我々の正義は先送りされていると述べ、時間と未来の脱構築的概念を探索している。ここではデリダなどの議論が使われる。そしてパートⅢ「哲学、知識、未来」では、ベルクソンの持続や潜在的なものといった概念から、自然的でも文化的でもある生きものの存在の理解へと論を進める。ドゥルーズやメルロ＝ポンティの概念も説明される。最後にパートⅣ「アイデンティティ、性差、未来」ではイリガライを中心にフェミニズムへの展開を試みる。女性のセクシュアリティを知られうるもの、測られうるもの、つまり「存在してきたもの」へと還元してきたことは、フェミニストの分析に役立ってきたと同時にその発展を妨げてきたと指摘し、そうではなくて「生成しうるもの」と考えることが、フェミニズムの未来へ向かう行動であると強調する。

以上のように、本書はグロスのフェミニズム論へ向けて流れが作られているが、それぞれのパートにおける生物学や法哲学などに関する概念の知識は驚くほど豊富である。本書を読むことによって、フェミニズムの新たな可能性を探るとともに、関連する分野への理解を進め、それらの発展を促すようなアイディアを得ることも可能になる。本書は、多くの人々にとって重要な示唆を与えてくれるにちがいない。

この書評では、評者の専門に引き付けてパートⅠを中心的に紹介することで、生をめぐる思想から見出される彼女の「時間性」に関する思想に迫っていきたい。

フェミニズムと生物学

一般に、自然は静的なものと考えられがちだが、実際には動的なものである。むしろ時間を考慮に入れて考えれば、どこにも静的で固定されたものなど存在しないということがわかる。自然を固定して考えるのは、我々の能動性、主体性ばかりに注目してしまったことの失敗である。

人間或いは生きものは能動的であるのに対して、自然や環境は受動的だという考え[2]こそが、フェミニズムを含め人文諸科学や社会諸科学が生物学と敵対する原因である。しかし、すべてのものは時間を貫いて変化し続けているということに気づけば、その対立は瞬く間に解消する。

重要なのは、グロスはフェミニストであるが、自然を戦うべき相手としてみなしてきた従来型のフェミニスト達とは一線を画しているということだ。フェミニズムにとって、長らく生物学とは男女の性差を強調し、女性の抑圧に正当性を与えるものとして認識されていた。確かに生物学的分析の中には家父長主義的、人種差別的、性差別的な問題のあるものもあったが、生物学の考えにまでも反対するのは不合理である。もしも生物学がより適切に、社会的、政治的生の豊かな変異可能性を説明するならば、我々は生物学のさらに繊細な説明を必要とする。

ダーウィンの思想

ダーウィンの仕事は本質主義と目的論の両方への複雑で微妙な批判を提供している。ダーウィンはまさに自然科学の範囲内で時間の非還元性や、偶然の中心性や、時間的感受性のある諸特徴[3]の蓄積を積極的

に主張している。彼の批判は、歴史と生物学を混ぜ合わせることへの動的でオープンエンドな理解に非常に役立つだろう。ダーウィンの進化論は、機械的で無方向な生物学である。それは、時間の前への運動が発展や進歩と同義であると想定せず、反復の作用や純粋な差異が種の生成に影響するという生産性を持ち、その生産性は我々を驚かせるものである。

ダーウィンの最も有名な著書『種の起源』の狙いは以下の二つにある。第一に、現代の生の形態は、過去の形態の変形であると示すこと。第二に、「変化を伴う由来」が存在している、つまり、突然変異可能性 [mutability] や変化可能性 [transformability] によって新たな種が生まれると同時に、環境に適応するよう修正を加えられるような仕組みが存在していると示すこと。この第二の狙いが進化の仕組みであり、目的論と機械論の論争に関わる部分である。

ダーウィンは種の進化における推進力となる三つの原則を変異、遺伝可能性、自然淘汰とする。まずランダムな突然変異が起きる。それらの多くは進行中の存在にとって不適切であるか有害であるのだが、中には環境変化に対して積極的な改善があると思われる変異がある。これが進化の契機である。そして遺伝可能であることは、差異の強化として理解されうる。遺伝的により多様な子孫が生じれば、自然淘汰もより効果を発揮する。また、資源が乏しく厳しい環境においては、わずかな差異が生存競争においてその個体を特権的に有利にするだろう。すると元は小さな差異であっても、世代を経ることで拡大されうる。そのような生存競争や変異の遺伝は自然淘汰という過程だということだ。自然淘汰は、変異に対して意味と価値を付与するための基準を与える。

ダーウィンは、自然淘汰を保存の法則という。そしてグロスは「保存の法則は、最適者の、つまり所与のかつ普遍の環境において最も適応的な存在の保存である。戦勝者たる種――あらゆる特定の瞬間での進化的戦いの「勝者」――の保存ではなく、変化に対して最もオープンで、従順な種の保存である」（p.21）と述べる。つまり、ダーウィンの進化論は通常極めて機械論的に考えられるが、変化を予測できない環境に適応して生存競争が起きるのであるから、変化に柔軟に対応できることを目的とする新たな目的論のようにもとれるのだ[4)]。

ダーウィンが明らかにしたのは、進化とは線状の発達或いは進歩的な発達というよりも、空間的時間的な分岐の力であり、環境が個体に与える影響とは矯正の過程ではなく自己変容の過程への推進だということである。

性淘汰

自然淘汰とともに生物の進化に働く力として、人為淘汰と性淘汰があげられる。グロスによると、それらは自然淘汰と独立にあるものではない。

人為淘汰は、淘汰の基準を人間の意図で変えたとしても、自然淘汰の力や原則に従うことから、自然淘汰を証明していると言える。性淘汰は、自然淘汰に反して、あるいは別のものとして働くのではなく、自然淘汰から分岐したものとして働く。生きものをより細かく精巧に作ることに耐え、かつ生存的繁殖的成功の基準を機能させるような、自然淘汰のひとつの特定的な技術として働いている。一方、性淘汰は人種

的差異に結び付けられやすい。ダーウィンは人種的差異を、環境条件というよりも、むしろ性的魅力、好みの結果の蓄積かもしれないと考える。これはヒトという種の中においても、時間を貫いて多様な形態が生じうることを示している。

性淘汰の基準は生存に有利なこととは限らない。生きにくく、敵に見つかりやすく、自分を守りにくくとも、異性を惹きつける魅力があれば、繁殖の機会を得てその遺伝子が保存される可能性が高まるのだ。この基準がどのように定まるのかはまだ解明されていない。

外部

構築主義は、社会システムの自己生成的な力や自己充足的な世界を創造することにおいてそれらの外にあるものからの論理的独立を強調する。レヴィ＝ストロースの親族関係システム、ソシュールの言語システムなどはその例である。「外部 [outside]」とは、そのようなシステム性を超えて、思考を引き起こし、生を自動性から離し、文化を生みだす。生きものの構造や計画に作用する一連の力であり、自然的であれ社会的であれ、何らかの出来事となって現れる。生きものは、文化のあらゆる創意工夫より上位で、その出来事の出す問題に取り組む。ダーウィンにとって「外部」とはまさしく自然淘汰である。

グロスは本書で三つの「外部」を示唆している。第一に、時間の前へと引っ張る力、つまり未来への方向づけである。人間の有限性や、道徳や個体の有効さという時間的制限を認識することを強いるような力であり、また各個体の時間的制限に打ち勝つために集合的社会的（そして性的）組織化を強いるような力である。第二に、変異の力、つまり自然の諸差異の増殖力である。これは自然が生きものに呈示する問題や挑発への文化による「解決」という変異を促進する。第三に、性差の生物学的挑発の力と、性差のパターンによって起こる人種差の発展の力である。両性の関係を統制し、ひとつの家族集団ネットワークを創造し、そして他のネットワークからの差異化をますます押し進める。つまり「外部」とは変化を起こす力であり、その力が働いている限り、我々は無時間的なシステムから必ずはみ出すことになる。

「時間性」の展開

以上のように、本書の最大の主張は哲学や社会学、政治学において「時間性」が忘れ去られていることへの批判である。時間に対する意識を少しでも持てば、「毎瞬間変化しないような情感、表象、意志など存在しないことが明らかになるだろう[5)]」。それにも関わらず、いくつかの言説は、「時間性」を無視していた、或いは、「時間性」を「空間性」にすり替えてしまっていた。それは部分的に言語システムの影響であり、本書でさえもその影響から逃れられてはいない。

ダーウィンは進化に必要な起動力を示したが、それによって進化が推進されてきたのは、グロスが言うように不可逆的な「時間性」を通じてである。時間の流れは生物学的進化だけでなく、パートⅡで見るように社会統治にも影響を及ぼしている。社会システムには含みきれない「外部」が残ってしまうということは、上述した通りである。例えば、法は過去の行動を判断し、統制するようにはたらく一方、正義は常に決定不可能な未来へとあいまいに先送りされる。法とは、我々が現在、来るべき正義を予想し歓迎する

ために用いられているものである。このとき「外部」からの、システムに含みきれなかった問いが提起されるならば、システムは新たな対処法を生みだすことになる。それは「時間性」に対して開かれていく過程である。

また時間は、我々が蓄えたり分割したり出来ない唯一の資源である。我々は時間を直接的には制御できないが、時間は無慈悲に経過することで我々を取り巻くすべてを変えていく。通常の思考は、周りを不動のものと想定することで可能になっているため、我々自身を含めあらゆるものが変化しているという事実を受け入れて思考するのは難しい。我々は現在を中心に、過去と未来へと時間を分けて理解するが、その現在は決して完全には存在しない。「時間性」には、保存（時間は過去に過去として保存される）と消失（現在はその力を、現在とは異なる未来を生みだす時に消失する）との二つの力がある。この二元的な力は、生物学的化学的な諸力から文化が進化的に受け継いだものである。そして、それぞれ異なる文化がそれ自身の方法において、二つの力をつなぎ、扱っている。

おわりに

掴みきれない「外部」の力から提示される問いに、いかに取り組み、いかに解決していくか。これを自然淘汰に当てはめて考えるとわかりやすくなった。生命は、予期できない自然の環境変化に対して、文化によって工夫をして答えていくが、常に文化が自然を克服できるわけではない。対応できるだけの文化を生む生命自体が、自然から生まれているのだ。自然／文化、静的／動的の二項対立ではなく、文化が自然に応え、自然が文化に問題を出し、それに応えることで新たな文化が生まれる。この動的な過程が進化であり、ここにおいて「時間性」を感じることができる。自然や時間といった土壌から生は出現した。そして時間の力で進化し、変化への柔軟性がますます生に求められる。

フェミニストがここまで積極的に生物学を語るのは極めて珍しい。グロスは決して本質主義的に生物学を利用するのではなく、我々自身を「生成するもの」と考えることで生きものの柔軟性を指摘し、文化が生成してくる背景として自然を見つめなおすことを提案しているのだ。もちろんダーウィン自身は全くフェミニズム的ではない。しかし本書によって、ダーウィン進化論のアイディアは自然／文化の二項対立を乗り越える点において、人文科学や社会科学に大きな転換をもたらしているとわかる。

本書は議論が多岐にわたっているので全体を通じて深く理解するのは難しいが、この幅広さこそがグロスの魅力である。これは「時間性」に関する新たな視点の優れたエッセンスが詰まった一冊であろう。

注

1）2012 年にラトガース大学からデューク大学に異動している。

2）フェミニズムの文脈では、男性に能動性を、女性に受動性を見ることを批判するが、ここではより包括的な議論を行う。構造は同じである。

3）時間を貫いて変化する環境などに適応してきた遺伝可能な形質のこと。

4）徹底的な機械論も徹底的な目的論も、時間性を無視し、最初にすべてが内包されているように考えている点で誤りであるとベルクソンは述べる。（ベルクソン『創造的進化』ちくま学芸文庫 60-62 頁）

5）ベルクソン『創造的進化』18 頁。